

統計環境の地域分析

その1 都市と農村

永井 博

I はじめに

統計環境が、地方都市（福岡市）と農村（熊本県矢部町）において如何に異なっているかを分析することは、興味深い今日の問題の一つである。地方都市としての福岡市（以下福岡とする）と、農村としての矢部町（以下矢部とする）を比較してみると、福岡は第二次・第三次産業、なかでも第三次産業を中心として大都市化へ進みつつある。一方、矢部は、モータリゼーションが普及してきたとはいえ、依然として、第一次産業である農林業を中心としている町である。この町は、熊本市から約40キロ以上離れているため、生活環境の直接的な影響が少なく、いわゆる都市化の影響の少ない地域である。

世帯構成をみると、福岡は、単独世帯20.0%、核家族世帯66.1%、その他の親族世帯13.7%であり、矢部は、それぞれ10.1%、50.2%、39.6%である。全国平均の13.5%、63.9%、22.6%と比べると、福岡では前二者がこれを上廻っており、矢部は下廻っている。また、親族世帯では、福岡は全国平均をかなり下廻り、矢部は上廻っている。（『統計環境の実態』1979年、3月、九州大学経済学部統計学研究室、18ページ参照）

福岡のように、人口が増加し、大都市化しつつあるなかでの住民の意識と、依然として人口減少傾向にあり、やっと今日、その歯止めがかかろうとしている農山村における住民の意識が、国の統計調査にどのように応ずるかという、調査主体と調査客体の関係を把握し、問題の所在を探り、改善策の糸口をつかもうとするのが本稿のねらいである。

II 国の政治と統計意識

都市化が進むにつれ、国の政治や政策に対して、国民の意識は変化していく。農山村といえども都市化がひとたび影響しはじめると、そこにおける住民の意識もそれに応じて変化していく。これらの事情を知るために、都市、農村にとって最も一般的な常識的な質問からはいつていくことにしよう。

「統計がなくても国の政治はやっていけるか？」（問10）という質問に対して、「国の政治には統計は絶対必要だ」と答えた人は福岡76.7%、矢部80.7%であり、「統計がなくても政治はやっていける」と答えた人8.6%、10.4%とあわせて考えると、その差は決定的な意味をもつもの

ではない。しかし、学歴との関係においては福岡と矢部との間に異なった特徴がみられる。

第1表 学歴別にみた統計と政治の関係

地点	学歴	絶対に必要	なくてもよい	その他	D. K.	計	
						(%)	(実数)
福岡	小	61.1	11.1	0.0	27.8	100.0	18
	中	73.1	7.5	6.0	13.4	100.0	67
	高	76.3	10.8	5.4	7.5	100.0	186
	大	86.3	5.3	5.3	3.2	100.0	95
	その他	37.5	0.0	25.0	37.5	100.0	8
	計	76.7	8.6	5.6	9.1	100.0	374
矢部	小	79.5	11.4	0.0	9.1	100.0	44
	中	82.4	8.8	1.4	7.4	100.0	148
	高	78.6	12.5	0.9	8.0	100.0	112
	大	88.2	11.8	0.0	0.0	100.0	17
	その他	60.0	0.0	20.0	20.0	100.0	5
	計	80.7	10.4	1.2	7.7	100.0	326

『統計環境の実態』1979年3月、九州大学経済学部統計研究室 82ページ

第1表から明らかなように、大学卒では、福岡86.3%、矢部88.2%、といずれも高い値を示している。これは、この質問内容に、インテリとして常識的に答えたという感じがある。したがって、高学歴者においては、福岡と矢部との間に地域的に有意な差異はないと思われる。しかし、小・中学卒業生においては事情は異なる。小卒では、福岡61.1%、矢部79.5%、中卒ではそれぞれ73.1%、82.4%となっている。矢部の方が、福岡より、小卒で18.4%、中卒で9.3%高い値を示している。

上記の事情は明らかに都市と農村における差異であると考えられる。そこで、矢部についていまま少し深く立ち入ってみたい。

農業において、米等の収穫量調査は、自己の農業経営や生活と直接的に結びつくため、国の政策に対する関心度が非常に高くなることが考えられる。とくに、米価決定は、農民にとって一番関心があるところで、農業従事者は、国が統計を基に農業政策を実施していることを熟知している。それゆえ、農業従事者に小・中卒が多い矢部では、福岡より、国の政治と統計との結びつきに関心が高いのは当然のことと思われる。

一般的に云って、都市化が進むにつれて第一次産業である農業は少なくなり、第二次、第三次産業が増加する。それに対応して、統計が自己の生活と直接的に結びつくという意識が次第に薄れてくる。そして今日のように政治はマスコミによって動かされるように思える時代になってくると、統計と政治の結びつきは断ち切られたように映り、国民にもそのように受けとめられるようになってくる。

そこで、政治と関連の深い「政党支持」についてみてみよう。この反応がどのように現われているか興味深いところである。

第2表 支持政党

		福 岡	矢 部
支 持 政 党	自 民 党	3 6.9	5 6.4
	民 社 党	3.5	0.6
	社 会 党	1 3.4	1 0.7
	共 産 党	2.1	0.3
	公 明 党	4.5	1.5
	新自由クラブ	1.6	0.3
	社会市民連合	0.0	0.3
	支持政党なし	2 9.7	2 5.2
	そ の 他	2.1	0.6
	D. K.	6.1	4.0
計		1 0 0.0	1 0 0.0
実 数		3 7 4	3 2 6

『統計環境の実態』28ページ

「あなたは何党を支持していらっしゃいますか」（問27）という質問に対して、自民党支持が、福岡36.9%にたいして矢部56.4%である。（第2表参照）

戦後の日本農業は、よきにつけ悪しきにつけ、その時々々の政府の政策に直接左右されてきた。自民党の農業政策に密着している矢部においては、自民党の支持率が56.4%というのは当然であろう。これは先述の「政治と統計」の結びつきの程度が小・中卒において高いことと関連している。

Ⅲ 職種・学歴と統計意識

「国の政治は国民の気持ちを反映しているでしょうか、それとも反映していないでしょうか？」（問7）という質問に対して、「反映している」と答えたのは、福岡16.8%、矢部24.8

％で、矢部がかなり高い。「反映していない」と答えたのは、福岡59.9％、矢部50.9％である。
この関係を学歴とクロスさせたのが、第3表である。

第3表 政治と国民の気持

地 点	学 歴	反映して いる	反映して いない	そ の 他	D. K.	計 実 数	
						％	数
福 岡	小	33.3	38.9	11.1	16.7	100.0	18
	中	16.4	53.7	10.4	19.4	100.0	67
	高	14.0	67.7	11.8	6.5	100.0	186
	大	18.9	55.8	16.8	8.4	100.0	95
	そ の 他	25.0	25.0	12.5	37.5	100.0	8
	計	16.8	59.9	12.8	10.4	100.0	374
矢 部	小	40.9	27.3	6.8	25.0	100.0	44
	中	20.9	50.7	10.8	17.6	100.0	148
	高	25.9	57.1	4.5	12.5	100.0	112
	大	11.8	70.6	17.6	0.0	100.0	17
	そ の 他	20.0	60.0	0.0	20.0	100.0	5
	計	24.8	50.9	8.3	16.0	100.0	326

『統計環境の実態』54ページ

小・中・高卒いずれにおいても、「反映している」は、福岡に比べて矢部が高くなっている。とくに、小卒は福岡、矢部の両方とも中・高・大卒と比較して高いが、矢部ではとくに40.9％を占める。これは終戦前に小学校を卒業した人が農業に従事しており、彼らは戦後の農業改善事業をはじめ、次々に変ってきた農業政策を体験した人々である。

また高卒でも、福岡の14.0％に対して矢部が25.9％である。それにはつぎの理由がある。矢部町の高校は、県立矢部高等学校一校のみであるが、その学科構成は、現在、普通科（2クラス）、商業科、農業科、林業科、家政科、生活科それぞれ1クラスの6学科7クラスからなっている。その卒業生は、昭和49年から51年までの3ケ年間においても、5割以上がこの町に就職しており、農業後継者づくりが成功している地域といわれている。国の政策とくに農業政策に対する関心度が高く、福岡との差が生じたものと思われる。

IV 調査員について

統計調査に対する被調査者の協力関係は、彼らと接触する調査員と不可分の関係にある。

そこで、どういう調査員が被調査者にとって「ことわりにくい調査員」であり、またどういう人が来たら「一番本当のことをいいやすいか？」を問うている福岡と矢部についての調査結果が、第4表（「ことわりにくい調査員」）と第5表（「本当のことをいいやすい調査員」）である。

第4表 ことわりにくい調査員

地 点	役場の人	自治会の世話人	近所の主婦	学 生 アルバ イト	特 に いない	その他	D. K.	計	
								(%)	(実数)
福 岡	8.3	38.0	17.4	3.2	29.7	2.4	1.1	100.0	374
矢 部	21.8	14.7	16.6	2.8	39.9	2.5	1.8	100.0	326

『統計環境の実態』 112 ページ

第5表 本当のことをいいやすい調査員

地 点	役場の人	自治会の世話人	近所の主婦	学 生 アルバ イト	その他	D. K.	計	
							(%)	(実数)
福 岡	19.5	20.1	8.0	28.1	21.7	2.7	100.0	374
矢 部	26.7	18.1	15.0	17.2	20.6	2.5	100.0	326

『統計環境の実態』 116 ページ

まず第4表からみてみよう。福岡と矢部では、被調査者の「ことわりにくい調査員」像が異なることがわかる。すなわち、福岡では「町内会や自治会の世話人」が最もことわりにくい調査員として挙がり（38.0%）、矢部の14.7%と大きな差を示している。他方、矢部では、「役場の人」（21.8%）が福岡の8.3%と鋭い対照をなしている。これは、明らかに地域差といえるだろう。両地点においては、「近所の主婦」、「学生アルバイト」に対する「ことわりにくい」イメージ差はない。ただし、両地点とも「ことわりにくい人は特にいない」と答えている者が、福岡29.7%、矢部39.9%あるがこの点については、のちに関説するつもりである。

つぎに、第5表「本当のことをいいやすい調査員」をみよう。ここで、顕著な地域差は、「役場の人」、「近所の主婦」、「学生アルバイト」に見いだされる。すなわち、矢部では、「役場の人」が26.7%、「近所の主婦」が15.7%であるのに対して、福岡のそれは、前者が

19.5%、後者8.0%である。また、本当のことをいいやすい調査員として、「学生アルバイト」をイメージしている者が、福岡28.1%、矢部17.2%である。

両表は、被調査者が、調査員に抱くイメージの両面であるから、両質問事項のクロスをとってみよう。第6表（福岡）、第7表（矢部）がそれである。これらの表は、上段が実数を、下段が総数に対する比率（%）として表示してある。

それぞれの地域類型で、調査者側からみて、最良の調査員は、いうまでもなく、「ことわりにくい」かつ「本当のことをいいやすい」調査員であろう。そのような人々は、表の対角線上に現われる。「ことわりにくい人は特にいない」を除けば、福岡では、「町内会・自治会の世話人」が、そして矢部では「役場の人」と「町内会・自治会の世話人」が挙がる。

第6表 問14の「a」と「b」のクロス表

問 問14a「ことわりにくい」

14b 「本当のことをいいやすい」

	福 岡	役場の人 1	自治会の 世 話 人 2	主 婦 3	学生アル バ イ ト 4	ことわり にくい人 はいない 5	そ の 他 D. K. 6	実 数
役場の 人 1		13 3.5	25 6.7	16 4.3	1 0.3	18 4.8	0 0.0	73
自治会 の世話 人 2		9 2.4	42 11.2	9 2.4	0 0.0	13 3.5	2 0.5	75
主 婦 3		1 0.3	16 4.3	7 1.9	0 0.0	5 1.3	1 0.3	30
学生ア ルバイ ト 4		4 1.1	37 9.9	27 7.2	7 1.9	27 7.2	3 0.8	105
その他 5		3 0.8	17 4.5	6 1.6	3 0.8	46 12.3	6 1.6	81
D. K. 6		1 0.3	5 1.3	0 0.0	1 0.3	2 0.5	1 0.3	10
実 数		31	142	65	12	111	13	374

第7表 問14の「a」と「b」のクロス表

問14 a 「ことわりにくい」

問14b 「本当のことをいいやすい」	矢 部	役場の人	自治会の世話人	主 婦	学生アルバイト	特にない	その他 D. K.	実数
		1	2	3	4	5	6	
役場の人 ¹		27	13	18	3	26	0	87
		8.3	4.0	5.5	0.9	8.0	0.0	
自治会の世話人 ²		11	17	13	0	16	2	59
		3.4	5.2	4.0	0.0	4.9	0.6	
主 婦 ³		14	7	10	1	16	1	49
		4.3	2.1	3.1	0.3	4.9	0.3	
学生アルバイト ⁴		13	9	10	3	19	2	56
		4.0	2.8	3.1	0.9	5.8	0.6	
その他 ⁵		6	1	2	2	50	6	67
		1.8	0.3	0.6	0.6	15.3	1.8	
D. K. ⁶		0	1	1	0	3	3	8
		0.0	0.3	0.3	0.0	0.9	0.9	
実 数		71	48	54	9	130	14	326

この問14 (a・b) と類似の設問が問15「調査員として、顔みしりがよいかそれとも顔みしりでない方がよいか？」である。第8表によれば、福岡では19.8%、矢部では46%が「顔みしりの人」がよいと答え、著しい差がみられる。以上の諸表(第4表~8表)を被調査者サイドからみれば都市化の進んだ福岡では、調査員として学生アルバイト、顔みしりでない人が好まれ、農村の矢部では、役場の人、顔みしりの人が好まれるということになる。

第8表 調査員との面識

地 点	顔みしり	顔みしりでない	そ の 他	D. K.	計	
					(%)	(集数)
福 岡	19.8	51.3	26.7	2.1	100.0	374
矢 部	46.0	31.6	19.9	2.5	100.0	326

『統計環境の実態』 120ページ

矢部がこういう結果になったのは、町役場に行けば、そこにいる人達は殆どお互いに顔見知りなので、町の事情や、お互いの家庭事情にも通じている。そういう意味での安心感と、日頃自分達の世話をしたり、また相談にのったりしてくれるという信頼感、それに加えて「お上（お役所）」のことには従うという意識が強いからであろう。

ここで先に保留していた「ことわりにくい人は特にいない」に一瞥を与えておこう。同じ回答肢であるが、都市部と農村部では、これを選んだ人の心象に違いがあるように思われる。このような問題を含む設問は、妥当な発問とはいいがたいが、それはクロス表を作成した後、に事後的に判ったことであるから、他山の石とするためにここに記しておく。それを示すのが次の表である。

第9表 「問14 aと問15」のクロス表の一部

問14 a ことわりにくい調査員

問15 顔みしりか調査員か顔みしりでない	問15 / 問14 a	特にない	比率 (%)
	都市部	顔みしり	39
顔みしりでない		104	46.6
その他, D. K.		80	35.9
計		223	100.0
農村部	顔みしり	113	41.7
	顔みしりでない	59	21.8
	その他D. K.	99	36.5
	計	271	100.0

第9表から明らかであるように、「ことわりにくい調査員は特にいない」と答えている者のうち、「顔みしりでない」調査員を望む割合が都市部で46.6%ある。この人々の「特にいない」という気持ちは、恐らく、ことわりたいたいはいつでも断わるという心証であろう。他方、農村部では、「特にいない」と答えている者のうち、41.7%が「顔みしり」調査員を望んでいるから、ここでは、文字どおり、だれが来ても調査に応ずるという心証と思われる。とはいえ、この解釈は、あくまでも事後的なものであるから、調査の本筋とはいいがたい。

ところで、「顔みしりの方がよい」、福岡19.8%、矢部46%、「顔みしりでないの方がよい」、福岡51.3%、矢部31.6%であることは、単に都市、農村の地域差だけであろうか、その点を明らかにするために、年代別の検討を試みよう。

第10表 年代別にみた調査員との面識

地 点	年 代	顔みしり	顔みしり でない	その他	D. K.	計	
						(%)	(実数)
福 岡	20 才代	17.0	58.0	21.0	4.0	100.0	100
	30 才代	10.8	54.2	32.5	2.4	100.0	83
	40 才代	20.0	58.9	20.0	1.1	100.0	95
	50 才代	22.8	47.4	28.1	1.8	100.0	57
	60 才代	41.0	15.4	43.6	0.0	100.0	39
	計	19.8	51.3	26.7	2.1	100.0	374
矢 部	20 才代	37.7	42.0	15.9	4.3	100.0	69
	30 才代	33.3	31.5	33.3	1.9	100.0	54
	40 才代	47.3	34.1	17.6	1.1	100.0	91
	50 才代	57.1	21.4	20.0	1.4	100.0	70
	60 才代	54.8	26.2	14.3	4.8	100.0	42
	計	46.0	31.6	19.9	2.5	100.0	326

『統計環境の実態』121ページ

福岡、矢部の両地点いずれも、20代から60代と年代が高くなるにつれ、「顔みしりの方がよい」と答えた人の割合が増しており、「顔みしりでない人の方」の割合は逆に低くなっている。これは若年になるにつれて高学歴化していることとも関係があるので、学歴とクロスさせてみる必要がある。つぎの表がそれである。

第11表 学歴別にみた調査員との面識

地 点	学 歴	顔みしり	顔みしり	そ の 他	D. k.	計	
		(1) %	でない			(3) %	(4) %
福 岡	小	33.3	27.8	38.9	0.0	100.0	18
	中	32.8	43.3	22.4	1.5	100.0	67
	高	16.1	55.4	25.8	2.7	100.0	186
	大	14.7	53.7	30.5	1.1	100.0	95
	そ の 他	25.0	50.0	12.5	12.5	100.0	8
	計	19.8	51.3	26.7	2.1	100.0	374
矢 部	小	56.8	18.2	22.7	2.3	100.0	44
	中	52.7	31.1	14.9	1.4	100.0	148
	高	37.5	38.4	23.2	0.9	100.0	112
	大	11.8	35.3	35.3	17.6	100.0	17
	そ の 他	60.0	0.0	20.0	20.0	100.0	5
	計	46.0	31.6	19.9	2.5	100.0	326

『統計環境の実態』 122 ページ

上の表から明らかなように、「顔みしりの方がよい」と答えた人は、福岡、矢部との間に相当の差があるが、しかし、両地点ともに、小・中卒者にパーセントが高く、高・大卒者のパーセントは低くなっている。また「顔みしりでない方がよい」と答えたのは、同じように両地点間において相当の差があるが、前者の関係と全く逆の傾向になっている。

以上から明らかなように、若年化、高学歴化にともない、「顔みしりでない方」を好むのは、後述のプライバシーの問題と関連し、福岡はもとより、矢部においても都市にありがちな要素が芽生えつつあることを意味する。とはいえ、福岡の高卒、大卒の多いのに比べて、矢部では、小卒、中卒、高卒が多く、とくに中卒、高卒が多いので、その芽生えは今のところごくわずかである。しかし、マスコミなどの媒体によって、促進されつつあることもまた否めない事実である。

いわゆる農村での、調査員が、顔みしりの役場の人であれば、誤りの少ない調査結果を得られる条件、すなわち本当のことをいやすいという、最も調査環境の悪化していない関係は、都市化に従って崩れている。

それは、その地域が大都市化へと進むに従っておきる避けがたい現象である。それゆえ、これに対処するために、われわれは、これらの現象を正しく把握し、理解しなければならな

い。この根本が、被調査者と調査員、すなわち、調査客体と調査主体との人的関係にある以上、被調査者の側面だけでなく、調査員の側面からの問題も同時にとりあげなければならない筈である。

そこでは調査員の選定と、彼等への統計教育が必要であり、それを支えるだけの行政措置が必要である。汎用調査員制度等の問題がクローズアップされつつある今日、とくに調査員の人数と教育という物的・人的配慮がなされなければならない。

V 調査項目と統計の真実性

調査項目によっては、「ありのままに答える」ものが $\frac{1}{3}$ 以下の場合もある。このような項目が多ければ多いほど、統計調査への国民の協力関係は弱くなる。

そこでまず、どの様な項目が、統計調査で聞かれたくないかを、福岡と矢部についてみることにしよう。

「統計調査でつぎのような項目について聞かれたとしたら、ふつうの人はどうしていると思いますか」（問17）という質問をして、a) 年令、b) 仕事の種類、c) 学歴、d) 支持政党、e) 収入額、f) 勤め先の名前、g) 初婚か再婚か、の7項目について調べた結果は、両地点ともつぎの表のようになった。(第12表)

福岡では、「ありのままに答える人が多いだろう」については、パーセントの高い方から、年令、勤め先の名前、仕事の種類、初婚か再婚か、学歴、支持政党、収入額の順になっている。また、矢部では、勤め先の名前、年令、初婚か再婚か、仕事の種類、学歴、支持政党、収入額の順となっており、福岡とは若干順位が異なっている。

全項目において、矢部の方が比率が高いが、両地点とも、とくに聞かれたくない項目としてあげたのは、“支持政党”と“収入額”である。この2項目について、「ありのまま答える人が多いだろう」と答えた人は、両地点ともに50%以下であった。

“仕事の種類”に比べれば“支持政党”は秘密にしておくことが出来るし、また自己の支持政党をそのままあかすことは、時と場合によっては、仕事や交際の上で支障がでるかもしれない。

また、収入額は、暗黙のうちに社会生活の優劣感につながり、台所を他人にのぞかれるという感じがあるからであろう。

仕事の種類や勤め先の名称も人によっては「個人の秘密」である。それは知り合いでない他人に、仕事や勤め先の名称から自分の身分や収入、あるいは学歴までも勝手に推し量られ、先入観を持たれることを恐れる気持があるからである。これは、周囲がほとんど顔みしりの知り合いばかりである農村地帯の住民感情とは大きく異なるものと思われる。

矢部では、仕事の種類も少なく、農業が主であるため、農業収入等については、たとえ秘

密にしたとしても、お互いの収入額を概算できるし、長年農業に携わった人はど、ありのまま答えても差支えないと考えているようである。

第12表 調査項目と真実性

地点	項目	ありのままに答える	少しはウソがある	答えない	その他	D. K.	計	
							(%)	(実数)
福岡	年 令	74.1	21.1	2.1	1.6	1.1	100.0	374
	仕事の種類	60.2	35.3	1.6	1.6	1.3	100.0	374
	学 歴	51.9	40.1	3.5	2.1	2.4	100.0	374
	支持政党	33.7	39.6	19.8	2.1	4.8	100.0	374
	収入額	17.1	52.4	26.7	1.9	1.9	100.0	374
	勤め先の名前	66.6	20.1	10.4	1.6	1.3	100.0	374
	初婚か再婚か	54.8	29.1	12.6	1.6	1.9	100.0	374
矢部	年 令	77.3	18.7	1.8	0.9	1.2	100.0	326
	仕事の種類	71.8	23.0	1.8	0.9	2.5	100.0	326
	学 歴	71.5	21.5	4.3	0.3	2.5	100.0	326
	支持政党	44.5	35.3	11.7	1.5	7.1	100.0	326
	収入額	23.3	52.5	21.5	0.6	2.1	100.0	326
	勤め先の名前	81.6	11.0	3.7	0.6	3.1	100.0	326
	初婚か再婚か	75.8	14.1	5.5	0.6	4.0	100.0	326

『統計環境の実態』 132～156ページより作成

年令別に福岡と矢部とを比較してみると、その間の事情がはっきりと理解できる。福岡の場合、“収入額”について、「ありのままに答える人が多いだろう」という比率は、年代との相関をもたないが、矢部の場合は明瞭な傾向性を示しているからである。

第13表 収入額と真実性

地 点	ありのままに答える	少しはウソがある	答えない	そ の 他	D. K.	計	
						(%)	(実数)
福 岡	17.1	52.4	26.7	1.9	1.9	100.0	374
矢 部	23.3	52.5	21.5	0.6	2.1	100.0	326

『統計環境の実態』 148ページ

第14表 地点・年令別にみた収入額と真実性

地 点	年 代	ありのままに 答える	少しは ウソが ある	答えな い	その他	D. K.	計	
							(%)	(実数)
福 岡	20才代	15.0	53.0	29.0	2.0	1.0	100.0	100
	30才代	10.8	66.3	20.5	1.2	1.2	100.0	83
	40才代	17.9	46.3	31.6	1.1	3.2	100.0	95
	50才代	15.8	47.4	29.8	3.5	3.5	100.0	57
	60才代	35.9	43.6	17.9	2.6	0.0	100.0	39
	計	17.1	52.4	26.7	1.9	1.9	100.0	374
矢 部	20才代	5.8	62.3	31.9	0.0	0.0	100.0	69
	30才代	18.5	59.3	18.5	1.9	1.9	100.0	54
	40才代	27.5	48.4	18.7	1.1	4.4	100.0	91
	50才代	30.0	48.6	21.4	0.0	0.0	100.0	70
	60才代	38.1	42.9	14.3	0.0	4.8	100.0	42
	計	23.3	52.5	21.5	0.6	2.1	100.0	326

『統計環境の実態』149ページ

VI 統計調査と秘密保護

統計調査の場合、統計教育が徹底していなければ、国民にとって「答えにくい」調査項目が多くなるにつれ、調査に対する協力関係も悪化する。それは、国の調査といえども、個人の秘密が守られるかどうかを疑問に思っている人がかなりいるからである。

「国の統計調査で、回答を記入した用紙をみつめている調査員や統計関係の公務員の人たちは、仕事の上で知ったことを秘密にしていると思いますか、それとも、なかには秘密を守っていない人もいますか」（問21）という質問に対して、つぎの表のような回答を得た。

第15表 秘密保護

地 点	秘密にして いる	守っていない	そ の 他	D. K.	計	
					(%)	(実数)
福 岡	40.1	48.4	6.4	5.1	100.0	374
矢 部	40.8	49.1	2.1	8.0	100.0	326

『統計環境の実態』176ページ

第16表 年代別にみた秘密保護

地 点	年 代	秘密にしている	守っていない	そ の 他	D. K.	計	
						(%)	(実数)
福 岡	20才代	36.0	56.0	4.0	4.0	100.0	100
	30才代	41.0	48.2	7.2	3.6	100.0	83
	40才代	44.2	45.3	6.3	4.2	100.0	95
	50才代	40.4	49.1	5.3	5.3	100.0	57
	60才代	38.5	35.9	12.8	12.8	100.0	39
	計	40.1	48.4	6.4	5.1	100.0	374
矢 部	20才代	34.8	58.0	2.9	4.3	100.0	69
	30才代	44.4	46.3	1.9	7.4	100.0	54
	40才代	31.9	57.1	2.2	8.8	100.0	91
	50才代	45.7	41.4	2.9	10.0	100.0	70
	60才代	57.1	33.3	0.0	9.5	100.0	42
	計	40.8	49.1	2.1	8.0	100.0	326

『統計環境の実態』177ページ

「秘密にしていると思う」と答えた人は、福岡で40.1%、矢部で40.8%と、約4割しかない。また、「なかには秘密を守っていない人も」と答えたのは、福岡48.4%、矢部49.1%で、約5割近い。

このように、統計調査において、個人の秘密がもらされているかもしれない、という疑念が、今日のような情報過多な状況のなかで国民に抱かれはじめてきたように思われる。

そこで問題となるのは、国の統計調査に対して、国民が抱いているような意識のもとで、「正しい統計」をつくるためには、どのように、個人の秘密と統計とが関連し合っていないか問うために、つぎの質問を行なった。

第17表 統計とプライバシー

地 点	正しい統計	個人の生活内容	そ の 他	D. K.	計	
					(%)	(実数)
福 岡	46.0	46.3	4.0	3.7	100.0	374
矢 部	46.0	43.6	1.8	8.6	100.0	326

『統計環境の実態』172ページ

第18表 年代別にみた統計とプライバシー

地 点	年 代	正しい統計	個人の生活内容	そ の 他	D. K.	計	
						(%)	(実数)
福 岡	20才代	40.0	51.0	5.0	4.0	100.0	100
	30才代	56.6	36.1	6.0	1.2	100.0	83
	40才代	42.1	51.6	4.2	2.1	100.0	95
	50才代	45.6	47.4	1.8	5.3	100.0	57
	60才代	48.7	41.0	0.0	10.3	100.0	39
	計	46.0	46.3	4.0	3.7	100.0	374
矢 部	20才代	44.9	50.7	1.4	2.9	100.0	69
	30才代	46.3	37.0	7.4	9.3	100.0	54
	40才代	42.9	46.2	0.0	11.0	100.0	91
	50才代	45.7	45.7	1.4	7.1	100.0	70
	60才代	54.8	31.0	0.0	14.3	100.0	42
	計	46.0	43.6	1.8	8.6	100.0	326

『統計環境の実態』173ページ

「国の統計調査と個人の秘密との間の関係について、つぎの2つの意見がありますが、あなたはどちらに賛成ですか」（問20）これに対して、「より正しい統計をつくるためには、個人の身上や生活内容にふれることがあってもしかたがない」と答えた人が、福岡46.0%、矢部46.0%と全く同じ比率であり、また、「正しい統計をつくるためであっても、個人の身上や生活内容にはふれるべきではない」と答えた人は、福岡46.3%、矢部43.6%ではほぼ同じ比率を示している。これは、「個人の秘密」にふれることよりも、正しい統計を作ることを優先させる考え方と、「正しい統計」を作ることよりも、個人の秘密を守ることを優先させる考え方が、殆んど5分5分に分れ、国の統計調査に対する認識の程度を示す指標となりうると考えられる。（第17表、18表）

Ⅶ 秘密保護と調査機関

調査主体が如何なる機関であるかによっても、調査客体である国民の協力度が異なってくる。

そこで、調査主体が新聞社である場合と、国である場合の二つについてみてみたい。

「世論調査で、新聞社からあなたの意見を聞いたとしたら、あなたは、あまり気がすまなくても答えますか、それとも、気がすまなければことわりますか」（問16）という質問に対して、両地点とも、「あまり気がすまなくても答える」としたのは35%前後

(福岡36.1%、矢部34.7%)で、「気がすすまなければことわる」とした人も、両地点とも58.3%と変らなかった。

第19表 民間調査機関と国民の反応

地 点	答 え る	こ と わ る	そ の 他	D. K.	計	
					(%)	(実数)
福 岡	36.1	58.3	4.5	1.1	100.0	374
矢 部	34.7	58.3	3.4	3.7	100.0	326

『統計環境の実態』 124ページ

これに対して、同じ質問内容(問16b)で、国の調査の場合については、「あまり気がすすまなくても答える」とした人は、福岡72.2%、矢部60.4%。「気がすすまなければことわる」としたのは、福岡19.5%、矢部31%であった。両地点とも、調査主体が新聞社の場合と異なる結果があらわれている。国の統計調査はこれまでこの観念に支えられて調査の実を挙げていたとみることができる。

しかしながら、国の調査に対して、福岡と矢部では、「答える」と反応した割合が異なる。

第20表 国の調査機関と国民の反応

地 点	答 え る	こ と わ る	そ の 他	D. K.	計	
					(%)	(実数)
福 岡	72.2	19.5	5.3	2.9	100.0	374
矢 部	60.4	31.0	4.3	4.3	100.0	326

『統計環境の実態』 128ページ

第20表から明らかなように、「気がすすまなくても答える」としたのは、福岡が矢部より11.8%多い。これについてはいまのところ明確な理由づけをもたない。

さて、国民の協力意識は民間より国の統計調査に対して強いが、国の統計調査に対してさえ、約20~30%が、「気がすすまなければことわる」としている。

また、「国勢調査のような、国の重要な統計調査はことわっても（拒否しても）よいと思いますか、答えた方がよいと思いますか、それとも必ず答えなければならないと思いますか」（問12）という質問に対しても、福岡では5.1％、矢部では8.3％の人は、「ことわってもよい」と答えている。そして、「必ず答えなければならない」としたのは、福岡28.9％、矢部21.2％となっており、「答えた方がよい」とした人は、福岡62.6％、矢部66.3％となっている。これは、国勢調査に対する国民の認識が低いこと、また国勢調査の重要性について理解していないせいではないかと思われる。これら両地点での国勢調査に関しては地点差は殆どなく、また、年齢、学歴等に関してみた場合も、両地点間に明確な差は見受けられない。

Ⅷ むすびにかえて

国が調査する場合でさえ、個人の秘密が守られていないと思っている人が50％近くいるということ、また、「統計をつくるための調査でひとりひとりが答えたことが、税金をかけるときの参考資料に利用されている」と思っている人が約10～15％もいるということ、さらに「身元調査などにはどうでしょうか？」という問に対しても、約10～15％の人が利用されていると答えており、ことによると利用されているかもしれないと憶測している人を加えると、この数字は約40～50％にものぼること、などが今回の調査結果からいえる。

このような意識が国民にある以上、二つのことが考えられる。一つは、国の調査といえども、統計調査への国民の協力関係が悪化する傾向にある。二つは、情報化が進むにつれて、国の統計調査もますますこの影響をこうむり、民間の調査と同一レベルで考えられるようになるのではないかということである。

このような事態に対処するためには、これまでの統計教育のあり方を再検討し、改善して行かなければならない。小・中学校の義務教育はもとより、高校、大学においても、国の統計調査に対する正しい認識ができるような統計教育が必要であろう。

（熊本商科大学）